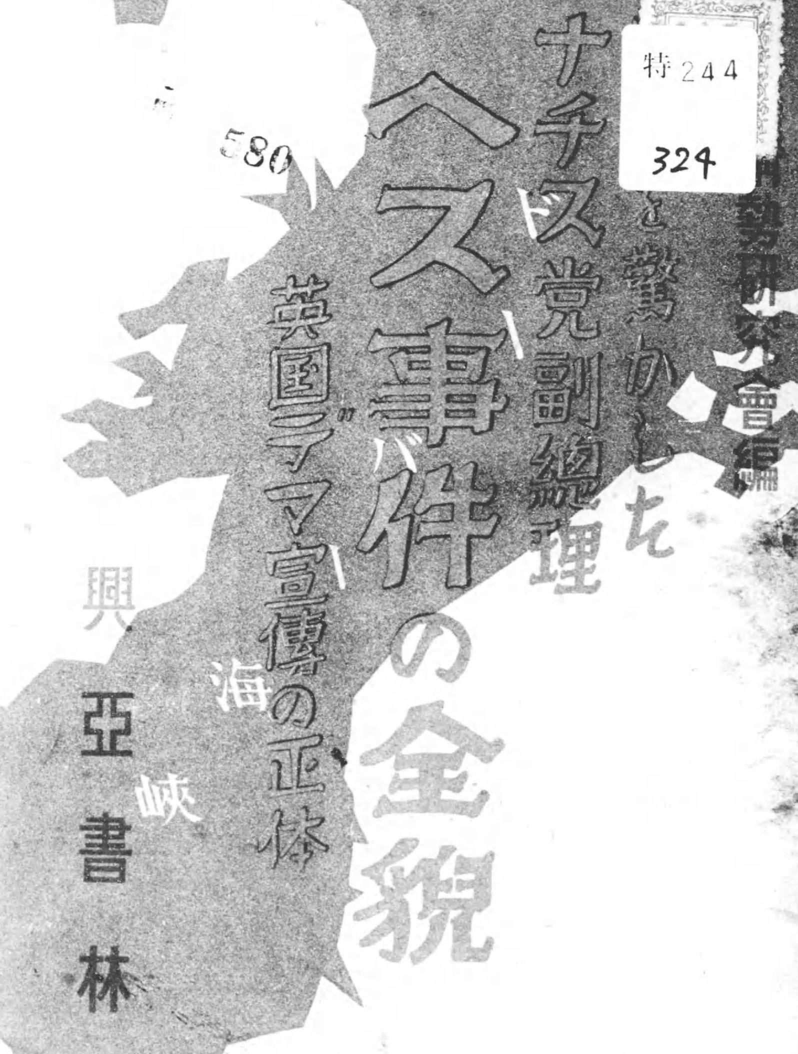
情勢研究會編

を驚かした
ナチス党副總理
ヘス事件の全貌
英國デマ宣傳の正体



興亜書林

世界情勢研究會編

ヘス事件の全貌

興亞書林版

はしがき

滔々たる歷史の大流も時には巨巖大石にぶつかつて、しぶきを飛ばし、一時ならぬ奇勝を呈することがある。

ナチス黨副總理ルドルフ・ヘス氏の謎の如き行動も、その一つといへよう。興味の點からいへば、ウインザー公の王冠をかけた戀即ちエドワード八世退位事件に比すべき近代史の一大エピソードである。その波動は大きいが、ともかく個人的な一事件である點に、共通の特徴がある。しかし、ウインザー公の場合は、老英帝國があの事件を一點とする頃から、既に凋落の途をたどつてゐたことであり、ヘス事件はナチス國家がドイツにとつて對英鬪爭にいさゝかの搖ぎも見せず、如何に國家の樞要人物とはいへ、單なる個人的悲劇として葬り去り得る旺盛なる興隆一途にあるといふ根本的に相反した相異點がある。

事件が起つたのは、五月十日夜であり、世間へ發表されたのは十二日夜、チャーチルが英下院で「眞相はもう暫く報告は見合せる」といつたきり、一切のニュースを禁絶させたのは十五日、翌十六日にはナチス黨が「もはやヘス事件は終了せり」と發表した。從つて僅々一週間の事件である。その一週間のうちに英米系の宣傳網は、ありとあらゆる反ドイツ反樞軸の虚構誣妄を行つた。今後また如何なる突飛なニュースをふりまわすかもはかり知れない。

ドイツとしては、あくまで「個人の悲劇」であることを實證するためには、對英戰をいやが上にも積極化する以外には、方法はないのである。獨當局は「世界はやがて他のもつと重大なる事件のために目を奪はれるであらう」と言明したが、果して數日後の五月廿日クレタ島攻略戰は、戰史未だかつてないグライダーによる大部隊進攻といふ華々しい幕を切つて落したのである。

われ〳〵は、こゝに、ヘス事件の全貌を記錄し、英米國のデマ宣傳の正體を見極めるとともに、世界新秩序戰に斷乎として邁進する盟邦ドイツの不動の姿

に信頼を深めるよすがにしようと思ふ。

六月一日

世界情勢研究會

目次

一、一九四一年五月十日の夜

國外通信禁止――ロンドン大爆撃――單機英佛海峽を渡る謎のメッサーシュミット機

一九四一年五月十日夜、スイスのチューリッヒから、次のやうなきわめて短い一片のニュースがニューヨークに達した。

「ドイツ政府は國外との通信禁止を臨時的に施行したものの如く、チューリッヒの電話技師はドイツとの連絡不能なる旨を報じてゐる」

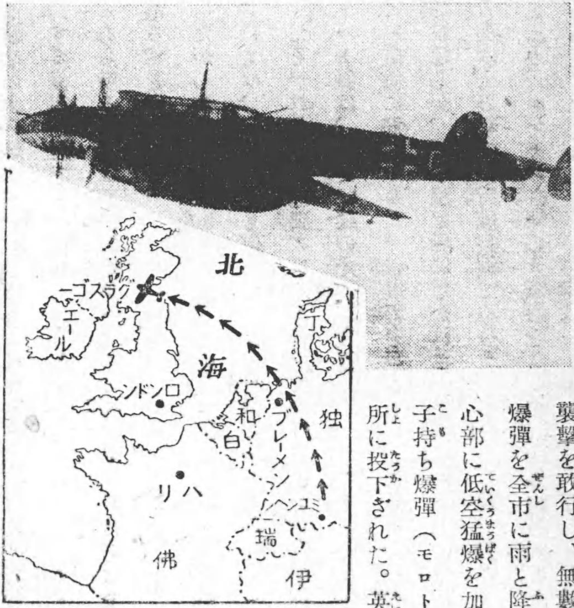
このニュースは、ニューヨークで次のやうな註釋を附け加へられて、更に全世界へばらまかれた。

「ドイツ政府が何故通信を禁止したかは不明であるが、先月（四月）下旬のアテネ陷落前後ドイツ政府は同樣措置をとつたことがあり、これはドイツの

重要な軍事行動があるか或は重大聲明が近く行はれる前提ではないかと見られてゐる」（東朝十二日朝刊）

このニュースは、しかも世界の人々の耳目をさ程にそば立たしめなかつた。各國の新聞も、ほんのお座なりの見出しをつけて、あまり目立たぬ掲載のし方であつた。軍事上の必要か政治上の駈引か、何れにしても戰爭國が、國外との通信禁止を隨時斷行することは、全くしばしばあることで、それに「重要な軍事行動」とか「重大聲明」とかの前ぶれだ、と意味づけるのは、背廣を着てネクタイをつけるのと同じ程度のニュースへのお飾りに過ぎないのが通例であるとりわけ、その夜は、ドイツ空軍のロンドン大爆擊が報じられてゐた。多少の疑問を持つてゐたものも、「重要軍事行動」とはこの大爆擊であつたかと思ひ當つた氣になつたものであつた。

その十日夜の爆擊は、ロンドンだけで實に六時間の長きに及んだのである。折柄の月明に乘じ五百機を越えるドイツ荒鷲の編隊は次から次へと踵を接して



メッサーシュミット機とヘス氏飛行空路

襲撃を敢行し、無數の燒夷彈、高性能爆彈を全市に雨と降らせ、一編隊は中心部に低空猛爆を加へた。爆聲爆彈に子持ち爆彈（モロトフのパン籠）も各所に投下された。英情報省はこの爆撃は猛烈にして大規模、死傷多數、被害甚大の見込み、獨機卅三機を擊破せり、と發表した。ドイツ側も、開

戰以來最大の爆撃の一つであり、九日の英機ハンブルグ、ブレーメン等爆撃に對する報復空襲であり、ヒットラー總統のいはゆる「ドイツの住宅區域にわたるあらゆる爆彈は百倍の爆彈をもつて報復されるであらう」との宣言の實行である。と發表した。

だがしかし、獨英双方とも、この大爆撃開始前に起つた重大なる「事實」については、一言半句も何らの發言を行はなかつたのである。

たそがれの頃、南獨アウグスブルグの飛行場を飛立つた一臺のメッサーシュミット機は、青白い謎の光芒を機體にまつはりつけて、英佛海峽の北をなゝめに一直線に飛んでゐた。操縦桿を握るは唯一人、にがみ走つた顏のドイツ將校思ひなしか、その眼は物に憑かれたやうに怪しい血の色を見せてゐた。

英本土爆撃の先行偵察機であらうか、否、この一機にこそ、「國外通信禁止」となり、ロンドン必殺の大爆撃となつた眞の理由が秘められてゐたのである。

ヒットラー總統は、この青白い一機を追ふが如くに、間髪を入れず、獨鷲大

編隊をロンドン上空へ送つた。そのころダウニング街の防空壕に身をひそめた老奸チャーチルは、轟々たる大爆撃もハタと止んだかと思ふばかりの衝動を受けて、ダフクーパー情報相から驚くべき、事實の報告をうけた。しかし沈默のうちに十日の夜は明けてしまつた。十一日の夜も獨鷲の襲撃は一層の熾烈さをもつて續けられ、英空軍も亦小癪にも獨本土襲撃を行つた。

獨軍司令部發表＝數百機よりなる獨空軍大編隊は、十一日夜イングランド南部及び中部地方の各重要軍事目標を大擧強襲、特に多數の飛行場に對し攻撃を集中し、格納庫、兵舍、燃料タンク等を爆破炎上せしめ赫々たる戰果を收めたり。

英空軍發表＝十一日夜前夜に引つゞきハンブルグ、ブレーメンその他ドイツ西北部諸要衝を爆撃せり。

かくして爆撃應酬のうちに十二日夜を迎へた。全世界を驚倒させた不可解なる「事實」は十二日午後七時十五分、まづ英首相官邸から發表された。

二、世界を驚倒せしめたヘス事件の發表

英首相官邸の記者團召集——ナチス黨本部の發表

その日—五月十二日—のロンドンは、十日來の猛爆に脅え切つて、夜になるのが「死」を迎へると同じ恐怖であつた。消防隊や火災看視哨が、疲勞し切つた神經を無理にゆり起して持ち場につき出したところ、午後七時、各新聞社、各國新聞通信の記者特派員は、ダフクーパー情報相の名で非常召集をうけた。記者たちは何事ぞと鐵兜にガス・マスクを携へてダウニング街十番地の古めかしい英首相官邸に殺到した。そして數分の後、ダフクーパーが讀み上げた發表文のあまりに唐突意外な「事實」にしばしあつけにとられて呆然としてしまつた。ダフクーパーは勝利者のやうな明るい笑ひさへ見せたのである。

——ナチス黨副總理ルドルフ・ヘスは單身スコットランドに飛行し落下傘で着陸、收容せられたり！



ナチス黨副總理ヘス氏

如何に奇怪とはいへ「大英帝國首相官邸發表」と前提された公文である。一瞬の後には記者たちは、電話機にタイプライターに、電信機に、必死となつて飛びついた。の電波は、直に數ヶ局で全世界にこの「事實」を火華しはじめた。

發表の全文は次の如きものである。

一、十日夜メッサーシュミット機一機がスコットランド海岸を横切りグラスゴー方面に飛び去つたとの報告があつた。

一、その後メッサーシュミット機はグラスゴー附近で墜落したがしばらくして落下傘をつけ踝を挫傷せる一ドイツ將校を現場附近で發見した。

一、右將校は直にグラスゴーの病院に運ばれた。はじめはホルンと自稱してゐたが、後刻自分はルドルフ・ヘスであると語つた。

一、ヘス副總理は彼の身分を證明する種々の寫眞を身につけてゐた。

一、その寫眞によりヘス副總理を個人的に熟知せる數名の者も右將校がヘス副總理なることを確認した。英外務省は戰前ヘス副總理と親交のあつた外交官を即刻病院に派遣することになつた。

一、なほ同病院の醫師は足部の加療後さらに愼重に診察した結果、ヘス副總理は多少精神に異狀を來してゐることを確認した。

このビッグ・ニュースを受取つた世界は、びつくりすると同時に一應首をかしげて、ヒットラー總統に次ぐべき戰勝ドイツの最高首腦者のこの奇怪な行動を「事實」かどうか、窮し切つた敗戰英國のまた「例の手」ではないかと、思ひ惑つたのである。しかし、四十五分後の十二日午後八時、ベルリンからのラジオ放送及び電信は次の如きナチス黨本部の悲痛なる、しかしもはや思ひ諦め切つたる發表を傳へ、英國側の發表をはつきりと裏書きした。

一、黨員ルドルフ・ヘス氏は數年來の病氣のため、ヒットラー總統から飛行機操縱を嚴重に禁止されてゐたところ、最近この命令に反して飛行機を入手五月十日午後六時頃、アウグスブルグ飛行場を飛び出したが、そのまゝ今日に至るも歸還せず、遺書により同氏が精神に異狀を來してゐたことは明かで精神錯亂の犧牲になつたものと認定される。

一、ヘス氏の副官等はヒットラー總統の禁止命令を知りながらヘス氏の飛行を止めず、しかも報告もしなかつたので、ヒットラー總統の命により即刻逮

捕された。

一、右の如き事情により、ナチス黨はこゝに同志ヘス氏搭乘機が何れかの地點で墜落して奇禍に遭つたものと斷ぜざるを得ないことは遺憾である。

英國情報省は、この重大事實の發表が二日間も經つてから發表されたことに對し、ヘス副總理の身許調査に二日間を費したと稱してゐるが、この重大事實の取扱ひに愼重といふよりは、思ひあぐんだといふことはありありわかる。如何にこれを對獨宣傳に利用すべきか、英側の考へたことはこの一點である。しかし、ナチス側がヘス氏をあくまで精神錯亂としてゐるのに對し、英國側も亦精神異狀と認めてしまひ、後に至つて「精神狀態は健全なる旨判明せり」と追つかけて訂正するなど、モノが大きすぎたせいか、英國側のヘス氏利用はまづ序戰において既に破綻を示してしまつたのである。

それにしてもドイツ興隆の元勳に對し、悲しむべき精神錯亂以外何等失踪の理由なしとしまづ斷言し、その生存を絶望としたナチス黨の發表を見れば、ヒ

ットラー總統以下血闘の間を共にした同志の胸中は察するに餘りある。ナチス同志のみではない、全ドイツ國民は彼の勳功と人格に萬腔の敬愛を寄せてゐた「余なきあとはゲーリング、ゲーリングなきあとはヘス！」と對英開戰の劈頭ヒットラー總統をして叫ばしめた彼ヘスである。獨國民のみでなく彼を知るものは悉く彼を尊敬した。彼の輝しい閱歷と人となりを紹介する前に、いま暫く謎の飛行と着陸の模樣について詳述しよう。

二、謎の飛行と運命の落下傘

一 月淡き北海を飛ぶ――ヘス機擊墜說――ヘス氏最初の發見者の話――カークパトリックとハミルトル公

ナチス黨の發表によれば、ヘス副總理が、アウグスブルグ飛行場を飛立つた

のは十日午後六時ごろとあるが、大體六時半にスタートしたものと見られてゐる。乘用機は獨空軍が新鋭を誇る戰鬪機メッサーシュミット機である。

アウグスブルグ飛行場は、ナチス黨本部「褐色の家」のあるミュンヘン西方五十キロにあるから、恐らくヘス氏は黨副總理としてその生活の大部分を過すミュンヘンからアウグスブルグへ出かけたものと思はれる。飛行機の乘用はヒ總統から禁止されてゐたとはいへ、何しろ黨の最高權力者である、入手することは左程の困難があるとは思へない。いはんや、その旬日前、即ち五月一日には、それが彼の最後の演說となつたのであるが、このアウグスブルグにあるメッサーシュミット機製造工場で、ドイツ工業界指導者たちへ褒賞授與式を行ひ戰時工業の躍進について一大獅子吼をした彼のことである。しかも前大戰當時から優秀パイロットとして盛名ある彼である。

最初英國側はヘス乘用機をメッサーシュミット一一〇型と發表したが一一〇型は三人の乘員を必要とする。ヘス氏單獨操縱であるから、恐らく一〇九型で

あらうと斷定されてゐる。何れにしても時速五百キロも出し得る精鋭機だ。



ドイツ國會におけるヒットラー總統(中央演壇)ヘス氏(〇の中)

ヘス氏が携へた一枚の航空地圖には青鉛筆でたゞ一本まつすぐにグラスゴーへ青い一直線が引いてあつた。運命の一線である。

彼が月光をあびた北海の波濤を如何なる感慨をもつて翼下に見たか知るよしもないが青い運命の一線をたよりに、ひたすら北西に進路をとつて七百五十マイル、五時間の飛行の後、スコットランド上

空へ達した時は、すでに午後十一時である。着陸地點と豫期したグラスゴー市は眞下にあるらしい。しかし着陸場を見出すことは至難である。

へス氏は跳躍一番、落下傘に身を托して敵國英本土へ飛び降りた。それは丁度グラスゴー市東南二五キロのストレーヴァン町の上空であつた。



グラスゴー附近に墜落せるへス氏搭乘機

乘機はたちまち地上に激突して大破してしまつた。ヘス氏が着陸したのはダンカヴェルといふ地點である。

こゝに是非附言しておかなければならないのは、グラスゴーのUP通信員が十三日に打電したヘス機撃墜説である。

「……その後判明せるところによれば、ヘス氏操縦のメッサーシュミット機は着陸前に英空軍のスピットファイヤー機に追跡され機關銃掃射をうけた。これがためヘス機には、十六乃至十八の機銃彈の孔があけられてをり、ヘス氏が機から飛出したのはまさに墜落せんとする直前であつたといはれる……」(五月十五日東日)

このことに對して英政府は何等の確認も與へてゐない。スピットファイヤーが撃墜したため、ヘス氏はやむなく落下傘で降下したのであつて、それでなければ、ヘス氏は「ある目的を持つてある目的地」へ完全に着陸出來たのであるといふ憶測が成立しないとも限らぬ。これは後述するヘス氏の和平案携行説と

闘聯するが、和平案携行がドイツは勿論英國側からも否定されたと同様に、このヘス氏機撃墜說は、徒らに事態を混亂させデマ化する英米系報道の適例の一つとして葬り去るべきであらう。一方英當局としても、國民に自國の最新鋭戰闘機の優秀さを一回でも多く示すためにも、メッサーシュミットを追撃し見事これを射落したといふ事實を殊更に陰蔽する道理はないのである。

さて、英國の土を踏んだヘス氏の最初の發見者ダヴィッド・マクリーンの話を聞かう。ダヴィッド・マクリーンといつても、スコットランドの一農夫である。この事件の登場者は全て世界の新聞の第一面にその名がしばしば見られる人々であるが、彼は、この偶然の大事件のため、グラスゴー東南の一地點が世界のスポット・ライトに浮き出されると同時に、そのまばゆい光に目をしばだたせながら、忽然と大舞臺の一人物として登場したに過ぎない。このことさへなかつたら、彼の名が世界中の新聞の活字になることは絕對になかつたらう。

マクリーンは語る。

「その夜、私はまだ起きてゐました。家のものはみんな寝てゐました。突然頭の上で飛行機の物凄い音が聞えたので、裏の畑へ飛び出して見ました。すると二百ヤードほど先のところで一臺の飛行機が地面にぶつかつて爆發し、たちまち火焔につゝまれました。私は恐ろしかつたが面白半分に見てゐますと、落下傘が一つ、ゆらり〳〵と降りて來て、一人の男がぶらさがつてゐるのが見えました。てつきりドイツの落下傘兵だと思つたので大いそぎで、家にとつてかへし、何か武器はないかと探しましたが、除草用の叉叉しかない自分一人ではかなはぬかも知れないが、とにかく裏へ驅けて行つて見ると、すぐそばの畑に落下傘をつけて轉がつてゐるではありませんか。その男は自分を見るとニッコリ笑つたので、私は安心して抱き起してやりました。男は「有難う」といつたが、足に怪我をしてゐるらしい。私は手を貸して家に連れこみました。家では母と妹が起き出して來て、お茶を沸かしてくれましたが「お茶はいらない、水をくれ」といひました。そこで私は警察に人をやる

ことにしました。そのうちに男はよくしやべるようになつて、自分の子供だといつて小さい男の子の寫眞を見せ非常に自慢らしい様子でした。彼は數時間前にドイツを飛立つたが、夜になつたので着陸したといひました。話の工合で敎養のある人と思はれ、その英語も訛りはあるが非常にハツキリしてゐて、私達が話しかける言葉はみんなわかるやうでした。服裝は立派な飛行服を着、時計や金の腕環とか、ひどく堂々たる風采でした。飛行中のことについては何もいはず、母や妹に對しては鄭重で、いろ〳〵有難うといひ、自分の生命を救つてくれた落下傘は是非手許におきたいともいひました。素性はあかさなかつたが、私達はドイツの空軍兵とは違ふやうだと思ひました。やがて警官が來るとニコニコして應對し、武器は持つてゐないからと安心させそれから起立して警官がポケツト探るにまかせ、そして連れて行かれました。」

グラスゴー市に連行される際、ヘス氏はハミルトン公爵の許に連れて行つて

ほしい、是非會見したいといふ希望を官憲に漏らした。このことはヘス氏が着陸した地點がハミルトン公の領地であり、しかもその居城から十五マイルの近くであつたことなどから、飛行の第一目的はハミルトン公との會見であるといふことがまづ强く印象づけられた。



ゲーリング元帥

病院に收容されてからは、英首相官邸の發表の如く、はじめはホルンと名乘つてゐたが、のちにルドルフ・ヘスなる旨を明かした。この報告に驚愕した地方官憲は、直にロンドンに急報した。この時のロンドンは獨鷲亂舞下に阿鼻叫喚を呈してゐたことは第一章の通りである。英政府は直にヘス氏と面識のある前駐獨英國大使館參事官カークパトリックを急派した。發表にある「戰前ヘス氏と親交ある外交官」とはカークパトリックのことである。

カークパトリックは戰前ベルリン駐在當時、ナチス首腦者たちと親交あり、一九三八年十月のミユンヘン會議直前故チエンバレン英首相に隨行してゴーデスブルグに飛び、ヒットラー總統とチエンバレン首相との會見にも立會つた人である。

カークパトリックによつて公式にルドルフ・ヘスなることが確認されると、直にヘス氏が會見を希望してゐたハミルトン公に對して直にグラスゴーへ飛行すべし、との召電が發せられた。ハミルトン公は英空軍中佐として某基地に勤

務してゐたのである。

ハミルトン公とは一體何者か。ヘス氏は如何にしてハミルトン公を知つてゐたか。ハミルトン公に何を語らんとしてこの謎の飛行を敢行したか。

そして相次で渦巻く英國の對獨惡放送に對し、微塵も動じないドイツ側の毅然たる態度等々、この事件の波動及び核心に觸れて行く前に、この邊で當の主人公ルドルフ・ヘスの人を畫いて見よう。

四、ルドルフヘスとその鬪爭

ヘスの生涯――輝しき二十年の黨歷――ナチス黨副總理任命――ナチス聖典・「我が鬪爭」――ヘンダーソン英大使の回想錄

ルドルフ・ワルター・リヒルド・ヘスは一八九四年エジプトのアレキサンド

リャに生れた。本年四十七歳である。

兩親はアレキサンドリャの港町に雜貨貿易商を營んでゐた。父親リッツ、母親はクララ。先祖代々南ドイツのバイエルンの山村で工匠を業としてゐた生粹のドイツ人で、祖父クリスチャン・ヘスが流れ流れてアレキサンドリャにやつて來た。母親のクララはチューリンゲン在の出で無口で貞淑な婦人、ルドルフの氣性は多分に母親からうけ繼いでゐるといはれる。

アレキサンドリャは當時まだ英國の支配下でなく、トルコ領であつた。ドイツ人小學校で敎育を受けたヘスは、十四の時母國へ戻り、ライン河のほとりの中學校に入つたが、父祖の業貿易商を繼ぐために、スイスのノイシャーテル商業學校に學び、のち轉じてハンブルグの商業學校に入つた。

廿才の時第一次世界大戰は勃發した。彼は直に志願してバイエルンの騎兵十九聯隊に所屬して出陣した。そして一九一六年ヴェルダンで胸部に貫通銃創を受けて後退した。この時の負傷は後々までも彼をなやました。

負傷が癒えると、彼は再び祖國のために立つた。こんどは飛行士として空軍に入り、追撃機隊卅中隊に所屬して戰線に活躍し、三度も負傷した。休戰となり除隊する時は中尉に昇進してゐた。



ナチス黨本部「褐色の家」

大戰後はミュンヘン大學で地政治學の提唱者カール・ハウスホーファー教授の教へをうけてゐたが當時敗戰ドイツが共産主義の彌漫によつて疲弊その極に達したのに痛

憤し、ナチス黨が結成されるやいち早くこれに關心を持つたが、ヒットラーの熱辯に動かされて、廿五才の一九二〇年六月黨員として入黨、この時からヒットラー總統の股肱となつて初期ナチス運動の鐵血鬪爭からはじまつて、一九二三年十一月九日ミュンヘンのナチス黨蹶起、いはゆる「十一月革命」に失敗し、ヒットラー、ゲーリング、フリク（現内相）等の同志とともに捕へられて、ランヅベルク監獄に投じられるなどその後十年、一九三三年ナチス政權獲得までは文字通りの惡戰苦鬪の連續であつた。黨首ヒットラーが時の大統領ヒンデンブルグ元帥から組閣を命ぜられ首相となるや、常時黨務を委任すべき機關の必要となり、黨副總理制が設けられ、いつ何時でも黨首ヒットラーを代表することになつた。同年四月廿七日ヘスはこれに任命された。そしてその年の十二月には黨副總理の資格で無任所大臣として入閣した。爾來ナチス政權の指導下にドイツは目ざましい躍進をつづけヒットラー首相はやがて總統となり、いよいよ不動完璧のナチス國家は築き上げられたが、彼は黨と政府を表裏一體

とする仲介者的立場にあつて、ゲーリング元帥に次いでドイツで三番目の最高地位にあつた。



ヒツトラー總統

以上は、ヘス氏の簡單な略歴であるが、ヘス氏がナチスの功勞者であることを最もよく物語る例として「わが鬪爭」の一節を紹介しよう。「わが鬪爭」がナチスの聖典であり、ナチスの指導原理世界觀の據りどころでありドイツの明日の豫言書であることは、あまりにも有名で

今更説明するまでもないが、この書をヒットラー總統がレッヒ河畔ランツベルク要塞監獄で執筆した時、總統の秘書としてこの著作に助力したのは、他ならぬヘス氏である。そしてこの書の中には、ナチス初期の同志の名が極く少數それもたつた數ケ所に見出されるのみであるがその極めて少數の名前のうちにも、ヘスその人の名は書かれてある。

「第十七章赤との戰ひ」の一節である。（室伏高信氏譯に依る）

「……八時すこし前に私（ヒットラー）が會場に到着した時、會場はすでに滿員であつた。我々の敵がそのなかにはいりこんでゐることは判つてゐた。私は私を待ちうけてゐた突撃隊員を整列させ、こんどこそ君たちが本當に君たちの信念を示すべき時である――死んで擔ぎ出されない以上は一人たりともこの會場を出てはならぬ、と激勵した。……一時間半、私は反對の叫び聲を無視して演説を行つた。そして私がその場の雰圍氣を支配してゐたやうに思はれた。敵の指導者たちが神經質になり出した。そして耳打ちをはじめた。

つひに嵐が突發した。數瞬間、ひどい騷ぎであつた。叫び聲と組打ちの音である。突然一人の男がテーブルの上へとびあがつて「自由！」と叫んだ。それが會圖であつた。忽ちその部屋は叫び聲と格鬪する人間達の激しい渦巻きとなつた。ビールのコップが飛び交ひ、テーブルのぶつかり、椅子の脚の折れる音がきこえた。私は私の位置に立つて、突擊隊員がその任務を果す有樣をみまもつてゐた。彼等は狼のやうに敵につかみかゝり、會場の外へ追放した。五分の後には血にまみれてゐない者は一人もなくなつた。私はその時はじめて彼等の中に多くの人材を、殊に私に忠實なモオリス、私の現在の秘書ルドルフ・ヘス、その他重傷を負ひながら、あらんかぎりの力を盡して鬪つた者達を、本當に知るやうになつた、廿分の後には敵の大部分が會場から追ひ出された。しかも彼等の數は、我々の四五十人に對して七八百人であつた！　突如ピストルの彈丸が二發會場の入口からとんで來た。つゞいて激烈な射ち合ひがはじまつた。……廿五分の後、部屋は無殘に荒されたが再び平靜

に歸した。……私は再び演說をはじめた……。」

一九二一年十一月四日夜ミユンヘンのホーフブラウハウスでの出來事であるが、烈々祖國革新のために果敢なる血鬪をする若きナチス黨の面目が躍如としてゐるではないか。「ドイツよ目ざめよ！」（一九二四年）といふ標語を作つたのも彼ヘスだし「バターより大砲！」（一九三六年）と絕叫し、國防國家ドイツの進路を示したのも彼である。ヘスはかくしてナチスとともに戰ひ拔いて來たのだ。

ヒットラー總統への忠誠と友愛は肉身の血よりも濃いものがあつた。黨の領袖のうちでは總統から最も信賴をうけ愛せられてゐた人物である。黨員にも國內一般にも深い聲望があつた。彼の輝しい黨歷もさることながら、寡默な、控へ目がちな、そして情味豊かな彼の性格の然らしめるところであらう。その辯舌は立板に水を流すやうな雄辯ではないが一句一句眞劍に迫力をこめて吐き出す語調は、ヒットラー總統の演說についでドイツ大衆をしつかりとつかんでゐ

た。
公用以外にはめつたに社交場裡には出なかつたし、國務大臣でありながら、大臣閣下と呼ばれることを嫌つて、單にヘル・ヘスと呼ばせてゐた。いつもはミユンヘンにあるナチス黨本部「褐色の家」で黨務を總攬してゐたが、ベルリンに出て來るとウイルヘルム街の總統官邸の近くに飾り氣のないたつた五室の官邸に住ひ、夫人もこゝに泊ることにしてゐた。
夫人も亦社交界にも滅多に顔を出さない人であるが、二人の間には滿二歳になる男の子が一人ゐる。ヘス氏は子供好きで、友人などには五人まではほしいといつてゐたさうである。
私邸は南バヴアリヤのアルプスに近い高地アルガウにあるが、冥想的な靜かな生活を愛す彼は、好んで、こゝに泊つた。生活ぶりも實に簡單で、ヒツトラー總統と同じく菜食で、酒も煙草もコーヒーもやらず、果物や果汁を好んだ。「哲人」だと綽名され、音樂を愛し、時には作曲までしたといふが、その半面

なかなかのスポーツマンで、水泳もやればテニスもやり乘馬もやつたが、一番打ち込んだのは飛行機であつた。前大戰のパイロットの腕前は一層磨きかゝつたと見え、一九三四年のソークシュピッツの民間飛行機競爭では一等賞を獲得した。一國の黨の副總理であり大臣でありながら、しかも平常は控へ目がちな物靜かな人柄にして、この行爲である。大戰直前までベルリンに駐在した英國大使ネヴィル・ヘンダーソンもその回想錄のなかで、ナチス首腦部のうちでは一番人に好かれる型の人間で、一般に非常な人望がある。しかしどことなく超然とした不可解なところがあり、何かの機會に熱狂的となりさうなところがあると思つた。と印象を書いてゐるが、これは後述するが今度の事件を彼の性格の悲劇と解するに最もわかりのいゝ鍵ではあるまいか。

五、毅然たるドイツ・英國デマに蹶起

黨副總理制の廢止――ナチス全體會議――黨本部發表――チャーチル英首相の議會における應答

筆を事件の進行へ戻さう。

十二日夜のラヂオで「事件」を知つたドイツ國民の驚きは想像に餘りある。全てを擧げて討英の戰爭に從事してゐるのに、國家の最高首腦の一人が、突如敵國へ飛んだのだ。しかもその人は、日頃から敬愛おかざるヘス氏であつたのである。國民は一時混沌たる氣持になつたことは爭へない。

しかし、何事にも動ぜず、何事にも天才的對策を持つヒットラー總統は、十二日付特別令を以て、黨副總理制を廢止し、ヘス副總理に代つて總統自らナチ

ス黨を指導する、從來の副總理事務所は黨官房と改稱し、全國黨指導幕僚長マルティン・ボルマンを右官房長に任命する旨を公布した。そして翌十三日ベルリンの總統官邸に、ゲーリング大ドイツ元帥をはじめナチス黨首腦部を網羅する全國地區代表、行政長官の全體會議を召集し、黨員激勵の演說を行つた。全體會議は、一致結束して最後の勝利へ邁進すべき決議文を採擇した。總統の演說及び會議の内容は極秘に付されてゐるが、ヘス事件の善後措置に關するものであつたことは間違ひなく、ナチス黨本部から時を同じうして次のやうな發表が行はれた。

ナチス黨本部發表＝ヘスは平和提案を行ふには、自分が誰よりも適當であると考へ、戰爭の事態が英帝國の完全なる崩壞にのみ終ることなきやう自分の一身を犧牲にしてこれを防止し得ると妄想したのである。彼の殘した書類及び彼の行動から判斷するに、彼は彼の希望を實現するに當つても、又その行動の結果についても、あらかじめ何ら明確な觀念を持つてゐなかつたことは

明らかである。彼のかゝる認識不足は、彼の活動範圍がこれまで黨活動の中にのみ止まつてゐたことに基くものであらう。またヘスはその希望を實現するに當つて英國側の陷穽にひつかゝつたものとも思惟される。

ドイツ國民はこの發表及びこれに附隨してなされた官邊の聲明、即ちヘス氏を英國は百パーセントに利用してあらゆる卑劣なデマを飛ばすのであらうが、そんなことはドイツとしては一切相手にしない。ヘス氏の行動は單なる個人的の妄動である、對英戰爭の決



チャーチル英首相

意は微動もしない、といふ强硬なる言明によつて事件の本體に對し漸く理解し得るやうになつた。衝動は拂拭されて來た。

一方十三日朝の英國の狂態ぶりはたつた一人の人が落下傘で自家藥籠中の人となつたゝめに、西部戰線もダンケルクもすべて帳消しになつたかの如くであつた。そしてあらゆる希望的觀測つまりこのナチスの有力者を敵國に渡したゝめに、ドイツの最高機密は悉く漏洩してしまひ作戰方針を變更しなくてはなるまいとか、ヘス氏は對英和平案を携行して來たとか、といつた記事を滿載した。

英下院はこの日新議場で開かれた。（十日夜の爆擊でウエストミンスターの議事堂は破壞された。新議事堂は場所を秘してある。）チャーチルはヘス事件に關して議員たちと次のやうな應答を行つた。

議員　ヘス副總理の英國への逃亡に關し、政府は更にステートメントを發表するか。

チャーチル　余は十二日夜の政府發表に何等付言し得ぬが、政府は近く右ナチス黨最高首腦が英國へ逃亡し來つた事件に關し重ねて發表する豫定である

議員　ドイツ側の發表によればヘス副總理は精神錯亂に陷つてゐるといはれるが、首相は右に關する情報を入手してゐるか。

チャーチル　未だそれに關する情報をうけてゐない。

議員　首相はダフクーパー情報相と共に精神錯亂說が全くの想像に基いてでつち上げられた虛構の所產であるか否かを確める措置をとつたか。

チャーチル　余は昨夜（十二日夜）ダフクーパー情報相と共に種々の手配をしたが余はこの事件は想像が事實そのものの姿によつて打負かされる場合の一つではないかと思ふ。

議員　ヘス副總理がグラスゴーの病院に收容されてゐると發表せしむることは爆撃を受ける虞れが多分にある故グラスゴー市民にとつてまづくはないか

チャーチル　グラスゴーから他の場所へうつすつもりである。

チャーチル首相のこの議會における答辯を反映して十三日英政府は次のやうな發表を行つた。和平案携行を全然否定し去つた點も注目されるが、前夜は、精神異狀を認めるといふ發表を行ひ、その發表まで二日間も手間取つてゐる程愼重であつた筈なのに、一夜あくれば、心身ともに健全である、と掌をかへすが如き豹變ぶりで、ナチス黨が一糸亂れず組織力を以て堂々と論陣を押し進めたのと全く反對に、底に何か根膽があることがありあり判る混亂ぶりである。

發表文に曰く――

一、診察の結果ヘス氏は最初の負傷を除き心身ともに全く健全である。

一、ヘス氏は捕虜として待遇、面會は何人と雖も許されない。

一、ヘス氏はグラスゴー病院より他の場所に移し加療中であるが、所在は發表し得ない。

一、ヘス氏が英國に和平提案を携行して來た事實はない。

チャーチル首相は、議會から退出するとバッキンガム宮殿に伺候してジョー

ジ六世に事件の顚末を奏上したりしたが、依然沈默を守り、政府も以上のやうな簡單な發表だけで、ヘス氏が何のために飛んで來たか、何を意圖したか等については、公式の言明は行はなかつた。一切は新聞の憶測的デマにまかせ切つた形である。何をでつち上げようとしてゐるのだらうか。たとへ突飛な妄想的行動をしたにしろヒットラー總統並にドイツ國民に忠實なヘス氏は、英國側の思ふやうな賣國奴的言動は一切肯んじないであらうことは確かである。

ドイツ側はこの日また次のやうな談話を發表してゐる。

「ヘスの遺書の內容を檢討するに、長い間精神的な病氣に惱ませられてゐた人間によつて書かれたものであることは明かである。ヘス氏の家族はドイツ國內にあり、ヘス夫人がトルコのアンカラに逃避したといふのは全くのデマである。ヘス氏の失踪と同時に副官等數人の部下が逮捕されたが、彼等は恐らく近い將來にヒットラー總統の命令により釋放されるであらう」

六、眞相を探る三つの觀測

敵國におけるヘス氏の生活――神經異狀說
――平和交涉說――脫走說

ヘス氏が身柄をうつされた病院は陸軍病院で、その場所は秘されたが、スコットランド內であることは、ヘス氏につき添つてゐるカークパトリックやハミルトン公の行動で察せられる。彼等は政府と打合せにその病院の近くの飛行場からしばしばロンドンへ飛行機で赴いた。

カークパトリックは十三日「ヘス氏は少し疲れてゐるやうだが、飛行の疲れだから大したことはない」と新聞記者團に語つた。ヘス氏は英語の雜誌や小說本を讀んだりしてゐるが、新聞とラジオは禁じられてゐる。陸軍のパジャマを着、齒刷子をはじめ身の廻り品は全部陸軍のものを用ひ、食事も病院の獻立そ

のまゝである。足の傷の恢復は目立つて早く、室内を壁につかまつて靜かに歩きまわつたりしてゐる。毎朝ベットを離れると定められた朝の食卓につき、食事がすむと醫者はヘス氏の脈を計り、傷口をみる。醫者が「お早よう」といつて朝の挨拶をしても、いつもきまつて唇を噛むばかりだといふ。ヘス氏のまわりには士官が常に護衞して居り、ロンドン警視廳特派の腕つこきの探偵が病院の警戒に當つてゐる。——

かうした敵國内における不思議な生活を送つてゐるヘス氏のまわりには恐ろしい勢ひで、ありとあらゆる憶測とデマが渦を巻いてゐるのである。英國側で何等の説明も、ヘス氏飛行の動機については行はれないので、餘計にひどい。大體神經異常説、平和交渉説、脱走説の三つに分けることが出來る。(五月十五日東日)

この三説のうち、英國が最も喜び、從つて宣傳これにつとめてゐるのは第三番目の脱走説である。ヘス氏がナチス黨内における意見の相違か、または勢力

爭ひの結果生命の危險を感じて脱走したのであるといふのである。なぜ敵國を選んだかといへば、中立國ではドイツの第五列に狙はれるからだと穿つたことを付け加へてゐる。(五月十五日東朝)ナチス黨の内訌などといふことはヒットラー總統の嚴然たる統御の行はれてゐる現在考へ得べくもない。當然英國側の願望的デマとして一笑に附するだけのことである。よしんば一歩讓つて勢力爭ひがあるとすればその相手は一體誰か。ゲーリング元帥をおいてはあるまい。ヘス氏は黨員としての古さでは廿番代でゲーリング元帥の九十番代よりはずつと古參であるが、政府部内においてはゲーリング元帥は先輩でもあり、空軍はいふに及ばず、經濟計畫に至るまで尨大な實權を握つてゐるから匹敵出來るはずはない。

精神異狀説は、最初英獨双方とも發表し、後になつて英側から否定され、ドイツ側もあまり病氣としての「錯亂」には固執しなくなつたが、ドイツからスコットランドまで長時間飛行したことなどから、この説は薄弱となる。しかし

醫學的意味でない精神の錯亂は、次の平和交渉説に關聯して考へられるのである。

平和交渉説には、ナチス黨の發表した通り、ヘス氏の個人的理想主義による行動と、もう一つはヘス氏個人の意圖以外に何等かの諒解があつたのではないか、といふ二説がある。この後者の方は全くのデマであり、ヒットラー總統の屢次の對英聲明に徴しても、かつまたドイツが現在なしつゝある徹底對英の戰爭を見ても微塵の疑念もさしはさむ餘地がない程、あまりにも明瞭な英國側の謀略宣傳、樞軸國離間の策である。

しからば一體、何が彼をあの奇怪な行動に走らせたのであらうか。彼の理想主義的妄想と彼の性格の異狀さとから齎らされた一つの悲劇と解すべきではなからうか。讀者は第四章で、物靜かな彼が、時として異常な熱狂的行動に出る性癖のあることをすでに御承知の筈である。

七、ナチス黨遺書により眞因を衝く

ドイツ官邊の重要發表——ロンドン發ニューヨークUP通信

ドイツ官邊は、十四日ヘス氏の遺書その他を調査した結果として次の如き長文の發表を行つた。これはヘス事件に明快な止めを刺すが如き重要な發表である。

「ヘス氏は五月十日スコットランド・ラナークシャーのハミルトン公爵領地附近に落下傘をもつて着陸したのであるが、ヘス氏とハミルトン公爵とは一九三六年のベルリン・オリンピック大會以來相識の間柄にあり、同公爵は戰爭使嗾者ともいふべきチャーチル首相とは正反對の英國內の一派に屬するのである。ヘス氏はハミルトン公爵がチャーチル一派に對抗して起上るべき政

治的努力を十分に保持するものと確信してゐた。ヘス氏の殘した遺書その他を檢するに、ヘス氏はその個人的折衝を以てありのまゝの眞實を明らさまにせんことを望んだのである。彼の今回の英國への飛行の眞の目的は彼が理性を以て話合ふことの出來る一派——即ちハミルトン公爵一派に對し現在の英國のありのまゝの危局とこれに對するドイツの絕對的優越を闡明することにあつたのだ。

ヘス氏は現在の英獨戰を以て世界の二大北方民族間の鬪爭であるとし、鬪爭が長引けば結局はいづれか一つが殘存するに過ぎぬと見てゐた。それは換言するならば、英帝國の潰滅を結果するのみといふに等しい。これが彼の確信であつた。これ故に彼は英國に飛行し、同地の友人に結局絕望的な英國の立場と搖ぎなきドイツ立場とを說明せんとしたのである。彼は彼自ら出馬することによつて、ハミルトン一派をして英國民に眞相を啓蒙せしめることが可能だと信じ、これを以て獨英間和解の基礎を打建てんとしたのである。

へス氏の遺書によると、彼は二日以内にドイツへ舞ひ戻るつもりでゐた。歸りのガソリンは彼が英國要路者の愚擧について英人に説明した上で、彼等から支給してもらふ算段であつた。彼が英國に赴いて獨英和解の使命を果した上再びドイツへ歸り得るやうに考へてゐたのは甚だ奇妙なことであるが、もともと彼はドイツを脱走しようなどとは毫も考へてゐなかつた。もしそんな考へを持つてゐたならば彼はスイスとかスウェーデンとかの敵國以外の國へ家族を連れて飛んで行つたであらう。ところが家族は前に發表したやうにドイツに殘つてゐるのだ。

へス氏の遺書によると、彼は、如何なる事情の下においてもチャーチル首相と會見することは欲してゐなかつた。彼は英國内の反チャーチル派に呼びかけようとしたのである。へス氏は理想主義者であり、立派なドイツ人であるばかりでなくナチズムの信奉者である。從つてへス氏はドイツに關して不利な言を述べようともしないし、述べることもないであらう。へス氏は和平を

齎し得るとの幻想によつてのみ行動したのであつて、ドイツの敵として行動したのではない。彼は彼の「使命」が百パーセントの成功を收めると信じ込み一種の固定觀念となつてしまつたのである。ヘス事件の悲劇と不快とにもかゝはらず、戰爭遂行に關するドイツの決意を微動もするものではない。ドイツの統一も影響されることはない。この事件は英國に對し宣傳材料の提供はするが、これも一時的のものである。こゝ數週間以内に英國及びその傀儡は、ヘス事件よりもさらに重大なあるものに遭遇してそれで手一杯となることであらう。」

このドイツ側の發表を裏書きする如く、UP通信のツォーレス・キャロル氏は、十五日ロンドンからニューヨークのUP本社へ次のやうに打電した。ロンドンからこの電報が發せられたといふ點が興味あることであると同時に、ヘス氏の行動が彼個人の理想主義的な和平意圖に出たものであるといふことを益々深く感じさせる。

「ヘス氏は數次にわたるハミルトン公苑の書翰において、ドイツの不敗を強調し、もし彼が英國に渡つて少數の人々と個人的に話し合へば、戰爭を終熄せしめることが出來ると確信してゐるか、または確信してゐるが如きふりをしてゐた。そしてヘス氏はドイツの絶對勝利と戰爭が今後も繼續するならば英國は完全に崩壞するものと確信し、英國側が長期戰を欲してゐるものは、チャーチル首相及びその側近數名のグループと信じ、それ故にもし自分が英國の融和論者と親しく接觸を保ち得るならば、チャーチル首相とその一黨の支配力を克服し、平和を樹立し得るものと信じてゐた。そして何處から見てもヘス氏には、獨軍最高司令部の内訌により、或は反逆者として敵國に致命的情報を提供するため英國に飛來したといふやうな説を證據立てるものは全然なく、またヘス氏が重要情報を英國に與へたとか、その用意があつたといふ證據もない。しかも今日まで明かとなつたところでは、ヘス氏は依然としてヒットラー總統に献身的熱情を捧げてゐる。」

八、鍵を握るハミルトン公爵

ハミルトン公トヘス氏の關係――英の奇怪なる沈默――ヘス氏の鬪病生活

問題の人ハルミトン公について語るのが、いさゝかおそくなつた感がある。紙數も先が見えて來たので簡單に述べよう。

英國における反チャートチル一派の立場とヘス氏が信じ切つてゐたハミルトン公は、今年卅九歳、スコットランド第一の名家ハミルトン公家第十四代の當主である。昨年父君が逝去したので襲爵したが、それまでは公爵の嗣子が侯爵であるきまりで、クライツデール侯と呼ばれてゐた。オックスフォード大學時代から拳闘選手として活躍し、ボクシングの殿様の名で通つてゐた。拳闘ばかりでなくスポーツは萬能選手であつたが、中でも飛行機が最も得意で、一九三三

年に世界最高峰の上空征服といふスポーツ的興味と寫眞測量をかねて、エヴェレスト飛行を行ひ、機長として盛名を走せた。ベルリンのオリンピックには愛機をかつて乗込んで、その際ヘス氏と知り會つたといはれてゐる。しかし一說によれば、ヘス氏が少年時代やハンブルグの商業學校在學時代、多くの英人の友人を持つたが、その中の一人が公であるともいはれる。目下英空軍將校として對獨戰に參加してゐるが、平和運動の一員であるといふことは初耳で、かつて戰前獨英親善協會のメンバーであつたといふ經歷を持つてゐるに過ぎないヘス氏とハルミトン公とのつながりやその內容は、今は知るよしもないが、何れにしても公爵は、ヘス氏と再三會見し、その結果をチャーチル首相に報告したことは事實である。

五月十五日ハミルトン公ならびにカークパトリックの報告をうけたチャーチル首相は、下院に臨んで

「ヘス・ハミルトン會見の內容は目下のところ報告することは出來ない。へ

ス氏が告白した程度をドイツ側に知られることは不利であるから、事件全貌の議會報告は適當の時期まで延期する。」

と思はせぶりたつぷりな演説をして、十三日下院における「近く眞相發表」の答辯を裏切り議員たちを失望させた。

英國ではこれを最後に、ヘス事件については一言半句の發言も聞けなくなつた。ニュースも、ヘス事件に關しては一切ストップを命じてしまつた。老猾なる英國が、このまゝ納つてしまふ筈はない。一體何をたくらんでゐるか。われわれは眉に唾しておく必要がある。

一方ドイツでは、十六日に至りナチス黨のスポークスマンは「ドイツに關する限りヘス事件は終了した。我々はもはやヘス氏とは何の關りもない」と聲明してしまつた。そしてヘス氏に對しては公式にも非公式にも非難的な言説は少しも聞かれず、却つて同情的な調子が見え、ベルリン市中のショーウインドーなどに飾られてあるヘス氏の寫眞の撤回を命ぜられることなくそのまゝにさし

許されてある。ヘス氏の師ハウスホーファー教授等が逮捕されたといふ說も飛んだが、これは事實無根で、神靈術とか星占術をやるインチキ師たちの一齊檢擧が行はれたことが判明した。これはヘス氏が星占に凝つて何百冊のそれに關する藏書があつたり、神がゝりな精神治療をやる連中とは何時間も話し込んでゐたりしたことから、健全な精神をむしばむこの種の一切の迷信的職業の彈壓を痛感したためといはれる。

ヘス氏がこうした星占ひや精神療法に熱中してゐたことは事實で、大戰や黨鬪爭でうけた負傷を基因とする重症の胃腸や肺結核との長い鬪病生活、それから來る神經衰弱、といつた種々の肉體的要素と彼の持つ理想主義的平和觀とが相錯綜して、今度の事件になつたのであらう。アメリカの新聞などは、特にこのミステリーがかつたものを誇大粉飾して、それが主因の如く報道してゐたが一要素ではあつたであらう。

九、理想主義者の末路・恩師ハウスホーファーは涙で語る

最後に、ヘス氏が持つた理想主義をハッキリ説明しつくすところの恩師カール・ハウスホーファー教授の切々たる談話をかゝげて、今次大戰が持つた大きなエピソードのエピローグしよう。

ハウスホーファー教授は地政治學の提唱者で、軍人出身、ミュンヘン大學教授。ナチスの生活圏主張の理論的根據を確立した人、今次大戰におけるノルウェー作戰の教授の地政治學的理論から示唆されたものといはれてゐる。その日本研究はつとに知られ、明治末年に來朝、著書に「大日本」「日本及び日本人」「太平洋地政治學」等ある。わが二千六百年記念に「日本はその帝國を建設する」を執筆してゐる。ヘス氏がナチス領袖中最大の日本通であることはこの師

の影響である。

「自分がヘス氏に最近會つたのは約一週間前だつたが、その時は平常と變りなく元氣であつた。

ヘス氏は前大戰に四回負傷し、ミユンヘンのホーフブラウハウスでヒットラー總統の身代りとなつて五回目の負傷をした。（第四章「我が鬪爭」記事の際）その度毎に非常に出血し、負傷の結果により生じた自體の諸所の苦痛には常に惱まされてゐた。

ヘス氏の私生活は模範的なものであつた。彼の唯一の熱烈な願ひは飛行機操縦であつた。自分もヒットラー總統の禁止命令を知つてゐたので、彼に度々お前の身體のためだから飛行機はやめろと警告したものだつた。

自分との關係は大學で敎へて以來のことで、ヘス氏が一九二四年ヒットラー總統の秘書となるまでは自分の敎室の助手をしてゐたのだ。一九二三年ヒットラー總統の「ミユンヘン革命」失敗後には自分の家にかくれてゐた關係な

どもあり、今日まで特別の親交をつゞけてゐた。

彼は純な理想主義者であつた。自分は多くの偉大な政治家を知つてゐるが、彼のやうに純な心の持主は少い。彼はこの純な心で全生涯をヒットラー總統に捧げてゐた。今度のことは勿論自分は事前には知らなかつた。知つてゐたらどんなことをしても止めたし、また止め得たであらうと、今となつては取返しのつかぬことだが殘念でならない。今度の悲劇も全く彼の理想主義から出たものであると自分は解してゐる。

ヘス氏は英國人を子供の時からよく知つてゐたし、英帝國の歴史的使命については理想主義者らしい見解を持つてゐた。この點についてはヒットラー總統も同じである。

今次戰爭をこれ以上續けることは英國は勿論、歐洲數億人の人たちの苦惱を増し不幸を永く續かせることになるので、彼は今回の擧に出たのである。それは理想主義者の乾坤一擲で人類のために盡さうとしたのであらう。それは

理想主義者の悲劇であつた。理想主義の神聖なる焔は尊いものであるが、また危險なものでもある。彼の今度の行爲がどんな結果をもたらすにしても、その純なる動機と彼の理想主義に對してはあくまで敬意を表したい。

彼一身の悲劇については自分は涙なしには考へ得ない。ヘス氏の悲劇は西鄕隆盛の悲劇である。自分は日本國民がかく理解して理想主義者としてのヘス氏に對し敬意と親愛とを續けてほしいと思ふのである。（五月十五日東日）

愛弟子と思ふ切々たる老師の言葉は、涙をさそふものがある。恐らくこの師の言葉のうちにこそ、こんどの事件の原因はいひつくされてゐるであらう。世界は、いまや恐ろしいまでに、あまりに現實的なあまりに激しい廻轉をしてゐるのである。美しい理想、高遠な意圖も、この現實の急流に遭つては、一たまりもなく押し流され、あとかたもなく消し去られてしまふ。心の底から共產主義國ソ聯を嫌つたヘス氏も、かつてはヒットラー總統や、リッペントロップ外相の現實外交の前には、獨ソ不可侵協定を容認せざるを得なかつた經驗があ

つたのである。いまや、舊世界を、即ち英米の指導下にある世界を、徹底的に叩きつぶして、歐洲においては獨伊、東亞においては日本の指導下に、新しき世界を建設せんとする大轉換期にあつて、その建設黎明期に當然持ち來らさるべき、古きものの壞滅といふ大悲劇は、彼ヘス氏には、堪へ得られないことであつたのであらう。理想主義者の末路！　これがナチス興隆の闘士に、無殘にも付せられる墓碑銘ではなからうか。

英國は、この事件が發表された最初の數日、毎日十回の對獨デマ放送を行つた。ヘス氏をめぐつて、ありとあらゆる嘘八百がドイツに向かつて放送された。しかしヒットラー總統の鐵の如き統制は、ドイツを微塵も搖がせなかつた。ドイツの將兵は、否全國民は、討英の歌を高らかに、進軍してゐる。ヘス氏の事件は、歴史の進行を妨げるものではない。文字通りの茶話となつてしまふであらう。彼等ドイツ國民は、ヨーロッパの指導國民として、目を高くあげて、勝利へ邁進してゐる。われ〳〵はこの事實をよく認識して、以て他山の石

とすべきであらう。

昭和十六年六月廿二日印刷
昭和十六年六月廿五日發行

定價二十錢

編者　世界情勢研究會

發行者　東京市神田區神保町一ノ二三
兒玉勳

印刷者　東京市神田區神保町三ノ一七
大島俊治

發行所　東京市神田區神保町一ノ二三
興亞書林

發賣所　東京市京橋區銀座西五丁目
電話銀座三四八九番
振替東京四六七四七番
川頭春陽堂

關西一手販賣所　大阪市北區堂島二丁目二十五番地
新正堂


ゲルハルト・ドマーク博士
凡ゆる化膿に
アルバジル
化膿性腫瘍
扁桃腺炎
トラホーム
麥粒腫
中耳炎

終